

# 復興曲線を用いたインタビュー調査による生活復興感の分析

—令和5年久留米市田主丸町豪雨・土砂災害を対象にして—

九州大学 教育学部 迎田瞳

九州大学大学院人間環境学研究院 准教授 杉山高志



## 1. 背景

### (1) 被災者視点の復興感

災害からの復興過程に着目するとき、当事者としての被災者が感じる復興感には重要な視点の一つであり、人口減少・高齢化の時代には復興主体としての被災者が当事者意識と自らの意向をもって復興に取り組むことが重要であるとされている<sup>1)</sup>。また、復興感に関する先行研究における、被災者の復興は物理的な客観的被害の回復のみでは十分でなく、被災者の心への主観的被害が回復されなければならないという指摘<sup>2)</sup>や、統計指標で測られる復興度合いと被災者の主観的な復興感には乖離があり、被災者の復興意識に基づいて生活再建の状況を把握するべきであるという指摘<sup>3)</sup>から、復興主体としての被災者の復興を分析するにあたっては、被災者の主観的観点から見た復興感に着目する必要がある。

### (2) 復興曲線インタビュー

被災者の主観的観点から復興過程について記述する手法として、復興曲線インタビューがある。復興曲線インタビューとは、被災者にx-y座標の描かれたシートを提示し、横軸を災害から今までの時間、縦軸を被災者の気持ちの変化と位置づけ、その変化を表す曲線を描いてもらいながら進めるインタビュー手法である<sup>4)</sup>。この手法は、インタビュアーがあらかじめ質問項目を設定して行うものではなく、インタビューの構成そのものをインタビュー対象者である被災者に委ねる。被災者自身が復興についての語りの主体であり、何をどのように語るのかを選択することによって自らインタビューを構成させていく。つまり、被災者の主観によって語りが成立し、被災者一人ひとりの個別具体的な復興が語られると

ころに復興曲線インタビューの意義がある。

復興曲線インタビューの現状として、既往研究で対象としている災害のほとんどが地震災害であり、その他の災害(高頻度災害等)が発生した被災地における実証例が少ないこと、また、一つの災害からの復興過程に関する中長期的な研究が多く、毎年のように災害の危機に瀕するような高頻度災害に関する研究は僅少であるという課題がある。このように、復興曲線を用いた先行研究において、地震災害について扱ったものが多く、高頻度災害にあまり焦点が当てられなかったことを踏まえ、本研究では高頻度災害に位置づけられる豪雨・土砂災害における被災者の心の復興過程について、復興曲線から見られる特徴について分析を行う。

## 2. 対象

本研究では福岡県久留米市田主丸町竹野を対象地域とした。ここは毎年のように豪雨に見舞われる地域であり、2023年7月の豪雨によって土砂災害が発生し、12世帯が巻き込まれ、1名が亡くなった。多数の住宅被害も発生し、発災から2年経過後も地域の土砂撤去作業等が行われている。

竹野の三明寺・富本地区では、2024年8月から特定非営利活動法人 YNF(以下、YNF)によって、地域活動としての復興応援ランチ会が開催されている。YNFは主に在宅被災世帯を中心に活動を行う団体であり、久留米市の災害支援では、発災直後から物資支援や土砂撤去作業などの生活再建支援や戸別訪問を行い、その後も個別避難計画の作成や住民の声の聞き取りなど長期的な支援を行っている。

YNFが主催する三明寺・富本地区復興応援ランチ会

(以下、ランチ会)は発災後に公営住宅で暮らしていた住民の集いの場となることを目的に始まり、支援活動の情報共有や復興に関する住民同士の意見交換、防災プログラムの実施など幅広く活動を行っている。自由参加型であり、参加者は公営住宅の住民から次第に地域全体へと広がり、毎回 5~20 人ほどが集まる。三明寺地区の自主避難所でもある三明寺区公民館にて机を囲ってランチをし、歓談の時間が設けられた後 YNF が示すテーマについての議論やプログラムを行う。筆者は 2025 年 1 月頃からランチ会に参加し、運営補助等を行っている。

### 3. 調査方法

インタビューは、2025 年 5 月 31 日に行われた第 9 回ランチ会に参加した地域住民 12 名を対象とし、ランチ後の歓談の時間を使って実施した。

図 1 の復興曲線に関する説明と記入例を提示し、復興曲線記入シートを配布した。曲線の起点を三明寺地区で土砂災害が発生した 2023 年 7 月 10 日とし、曲線とともに復興過程や心理的变化等の情報を書き込むよう指示した。また、記入する際の時間の間隔は指定せず、発災時以前の過去や調査日後の未来についての言及も含めて良いものとした。

復興曲線の記入が完了したのち、書き込まれた復興曲線をもとにしたインタビューを行った。インタビュー

#### 【復興曲線インタビュー】

復興曲線とは、横軸を災害から現在までの時間、縦軸を被災者の気持ちの変化とし、その変化を表す曲線であり、被災者の心理的な復興感を表すものです。縦軸の切片が 0 の部分を「災害が起きる直前の心のレベル」として、発災後から現在に至るまでのご自身の心の変化を曲線で表してください。また、生活復興の過程や心理的变化が起きた要因等があれば、曲線とともに書き込んでください。

今回は、2023年7月10日に田主丸町で起きた土石流災害を起点としています。横軸の目盛(時間の間隔)は特に決めていませんので、自由に記入してください。また、災害が起きる前に感じていたことや心理的变化のきっかけ等があれば縦軸より左側に書いていただいてもかまいません。記入例には未来についても記されていますが、現在までのことを書いても、未来について言及しても結構です。

一は対象者が自身の復興曲線に沿って自由に発言する形式で行い、より詳細な情報の聞き取り及び対象者自身による客観的な分析を目的とした。

本研究の調査は、九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門および都市共生デザイン専攻・空間システム専攻等研究倫理委員会の承認(承認番号: AUD2024-07)を得て、個人情報の取り扱い、取得データの匿名化等の倫理的な配慮を厳に留意しつつ、調査を実施した。

### 4. 結果

対象とした地域住民 12 名のうち、11 名から復興曲線データが得られ、そのうち 10 名から復興曲線データに基づいた語りが得られた。

復興過程において、復興状況ごとの被災者の心理状態や変化を比較するため、得られたデータについて復興のフェーズごとにみられる曲線・語りの特徴に関する分析を行った。復興のフェーズは、土砂災害発生前の I.発災前、発災時から避難所生活や家宅の復旧作業が始まった II.災害直後(発災後 1,2 ヶ月間: 2023 年 7 月~2023 年 9 月)、土砂の撤去作業などの復旧工事が長く続いた III.復旧期(発災後約 1 年間: 2023 年 9 月~2024 年 5 月)、雨量が増え、災害の危険度が高まる時期である IV.出水期(2024 年 5 月~2024 年 7 月)、発災から 1 年を迎え、ランチ会を

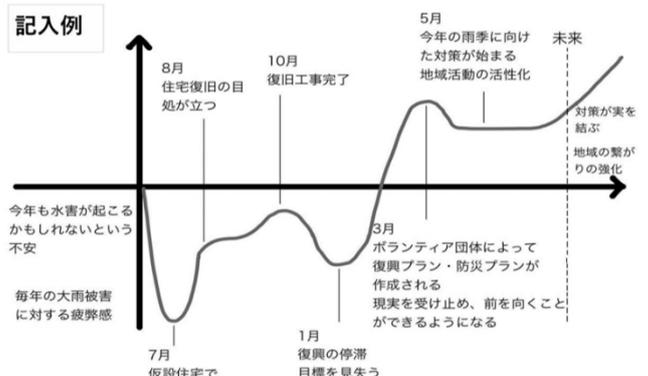


図 1 提示した復興曲線に関する説明と記入

はじめとした地域内の活動が活発になったV.復興・創生期(2024年7月～2025年5月)、調査日以降のVI.未来の6つに分類した。以下、各フェーズの特徴を分析する(“”内はインタビュー中に得られた発言である)。

## I. 発災前

“自分たちは大丈夫だと思っていた”、“大きな被害が出るとは想像していなかった”といった発言がみられ、大雨が毎年のように頻発する地域でも、大規模な土砂災害のリスクが具体的に想定されておらず、防災意識のレベルが実際の被害状況と釣り合っていないことが分かる。

## II. 発災直後 (2023年7月～2023年9月)

この時期の曲線は主に、①災害後一度沈むが、その後上昇する、②災害後沈んでから上昇しない、③災害後に沈まなかったという3つの型に分類された。①では“自宅に帰ることができた”ことによる暮らしの中心となる住まいの確保や、“子どもたちが土砂の片付けに来てくれた”といった身近な人との繋がりが発災直後の心の復興に結びついていたと考えられる。②では避難所で過ごす不安感や、“山での仕事ができない”といった日常の喪失が復興を阻害する一因となっていた。③では共に作業に取り組む仲間と“力を合わせばなんとかなる”と気持ちを維持しようとする人や、“一心不乱に復旧作業に奮闘した”ことで気持ちを高ぶらせていた人の様子が見受けられた。

## III. 復旧期 (2023年9月～2024年5月)

この時期の曲線は、上昇と下降を繰り返しているもの、停滞しているものなど多様な型があるが、曲線が上向きになった時期の理由として語られていた要因には、復興・防災プランを作成したこと、復旧工事が始まり土砂が片付いてきたこと等が挙げられた。対して、曲線が下向きになった理由としては、復旧工事がいつ終わるのか不安、1人での作業、ボランティアの減少などが語られた。

また、特徴的な曲線の比較として、ほぼ日常の生活に戻ったことで上昇しているものに対し、一方の曲線では下降しているという違いが見られる(図2)。この比較から、「日常に戻る」ということが心の安定につながる人もいれば、気持ちの落ち込みにつながる場合もあり、後者のように被災後得られた「日常」は単に暮らしを取り戻すだけでなく、今後の生活の漠然とした不安を引き起こすきっかけともなり得ることが察される。

## IV. 出水期 (2024年5月～2024年7月)

冬の時期は上向きでも、災害の危険性が高まるこの時期には下向きになるものがほとんどであり、“雨が降ると1年前の様子を思い出して怖い”、“また大雨が降らないといいなという心配”といった語りにもあるように、大雨・土砂災害は繰り返す災害という認識により、災害が発生しやすい出水期に落ち込みが見られる(図3)。その一方で、大きな被害が出ることはなかった2024年の出水期を踏まえて、“今回は大丈夫だったが次回(来年)は分からないから準備しよう”というように来年への備えの意識も芽生

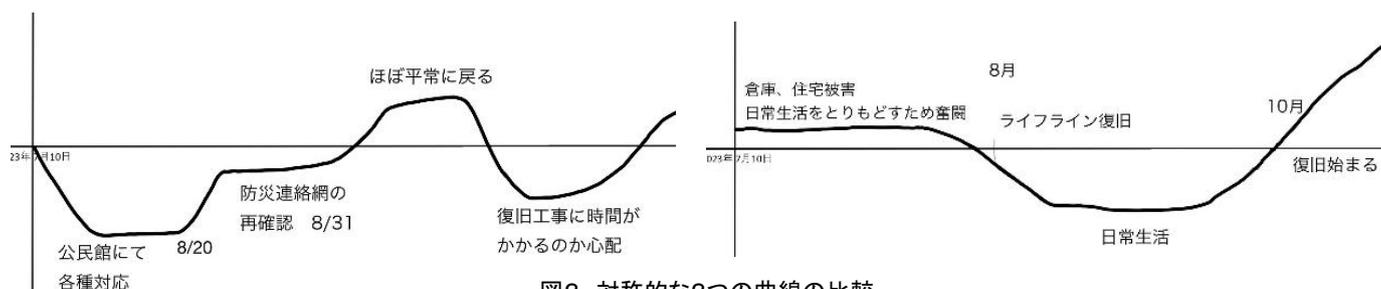


図2 対称的な2つの曲線の比較

※曲線と書き込みは筆者が書き起こした。図3,4,5も同様である。

えたことが分かる。

## V. 復興・創生期（2024年7月～2025年5月）

“工事に数年かかると聞き、気持ちが下がった” “冬頃になっても不安感はある” のように、被災後の復旧工事が完了しないまま次の出水期を迎えることへの「未来への不安」を抱いていた。一方で、“災害を経験して心の準備ができているため、災害に対する考え方が上向きになった” “今年の雨期に向けて自主防災、自主避難の動きを固めたい” といった前向きな発言が見られ、YNF や地域住民の取り組みがランチ会を中心とした防災活動への積極性を高め、「防災意識の向上」に貢献したと言える。また、“復旧活動に対する使命感や、地域に対する思いが深まった” “校区の防災組織が充実してきたり、ハザードマップの作成で自治区の防災意識が高まってきたりすると自分の気持ちも高まる” というように、地域の復旧活動に力を注いでいた方々は「地域貢献」への言及がみられ、地域の復興が自身の心の復興に結びついていた。

## VI. 未来

未来についての発言では、復旧・復興の明るい兆しとして、“今年の活動で道付けができたから、来年はさらにスムーズになると思う” “砂防ダムが完成に向けて4年スパンで進んでいる。完成すると、安心まではいかなくとも安全まではいけるのではないか” という期待がある一方で、これからの災害に対する不安と

して、“未来の災害のことを考えると、子どもや要介護の家族が心配” “自主防災や自主避難の体制を築かなければ、この地区での生活は不安が消えない” といった不安感が語られている。

復興曲線に表れている未来については下向きになっているものがほとんどであり、復興計画が進んでいるものの、今後の防災対策にはまだ不安が残っているのだと考えられる。

## VII. その他

インタビューの中では、今回対象としていた豪雨・土砂災害以外の災害や不安感についても言及がみられた。地震、火事が怖いといった声や、災害よりもニュースで見ると変質者が怖いといった発言もあり、「不安感」「恐怖感」という共通点によって導き出された話も得られた。

## 5. 考察

### （1）豪雨・土砂災害の復興曲線の特徴

本研究で行った復興曲線インタビューの分析から、豪雨・土砂災害被災者の心の復興過程の特徴として、災害の危険性が高まる特定の時期に心理的ストレスを抱えること、復興過程における防災活動が被災者の心に与える影響が二面性を有していることが見出された。

インタビューを通して、心の復興の障壁となった主な要因としては、災害が繰り返す不安、出水期の落ち込み、復興と防災対策の同時進行が挙げられた。地域

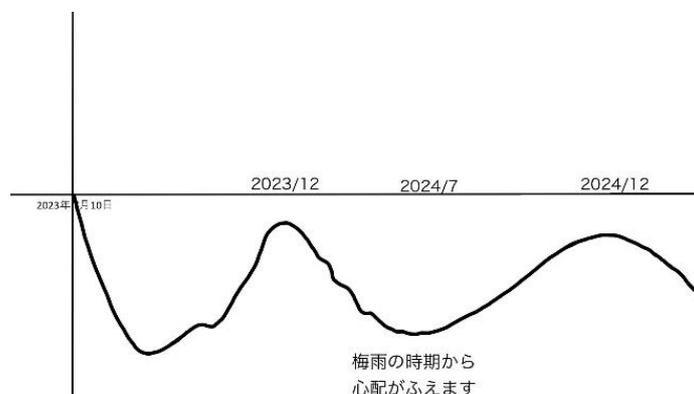


図3 出水期に下降傾向が見られる曲線の一例

の復旧・復興が進んでいても災害の危険性が高まる時期には落ち込みが見られる点は、高頻度災害に位置づけられる豪雨・土砂災害が発生しやすい地域特有の傾向だと言える。加えて、この落ち込みは物理的な被害に起因したものではないということが本質的な要素である。2024年の出水期には大雨による被害は発生せず物理的被害を受けなかったにもかかわらず、心理的なダメージを受けていたことが復興曲線に表された。この落ち込みは過去の被災時の様子がフラッシュバックすることによる恐怖感と、これからの未来で繰り返し起こり得る災害への不安感をもたらしたものであると考えられる。

ここで、「災間」の概念を参照する。災間とは二つの災害に挟まれた、つかの間の平時であり、厄災が何度も繰り返すことを前提にしている<sup>5)</sup>。被災地において、「災間」では過去の災害からの復興と未来の災害への防災対策を同時に行わなければならないという二重の負担があり、それが心の復興を妨げる一因となっている可能性が見出された。

一方で、心の復興に寄与した主な要因としては、復旧・復興の進展、今後の防災活動の具体化、地域内の交流が挙げられる。連鎖的に起こり得る災害の危機に対して、被災経験を踏まえた防災活動や事前復興の動きが地域で波及していることが地域住民の心の支えとなっており、未来の災害を見据えた「災間」での防災力の向上が現在の心の回復にも影響を及ぼしていると考えられる。

以上で述べた、心の復興に影響を与えた要因の特筆すべき点として、心の復興の障壁となった要因、寄与

した要因のどちらにも「防災」が含まれているということがある。防災活動は地域の防災力や防災意識を高め、漠然とした不安感の解消につながるものであるということは既往研究においても多く示されており、本研究によっても明らかとなった。しかし、被災後の復興において目で見ることのできる物理的被害は回復されても、視覚的には判断できない主観的な被害が回復されず、心の復興が果たされていないまま防災活動が行われると、復興と防災が二重のおもりとなり得る。「災間」において過去の災害からの復興や未来の災害への防災に取り組むとき、復興と防災の間に存在するジレンマに目を向ける必要があることについても本研究によって見出された点である。

## (2) 震災被災者の復興曲線との比較

復興曲線に関する先行研究において主に取り上げられてきた震災被災者を対象とした復興曲線では、被災者の惨事ストレスは災害直後よりも少し時間がたった後のほうが深刻であるという「2番底」現象が見られたことが報告されている<sup>6)</sup>。本研究で得られた復興曲線にも、「2番底」になり得る沈み込みが見られ(図4)、発災時のことを思い出した、手伝いをしてくれる人がいなくなり1人になったことなどが要因として語られている。発災時の突発的、衝撃的な日常の喪失よりも、その後の復旧活動による疲弊感や発災時の記憶がもたらす災害への恐怖感の蓄積が被災者の心へ強い負荷を与えるという点は、災害後の被災者への「こころのケア」の観点においても考慮されるべき特徴であると言える。

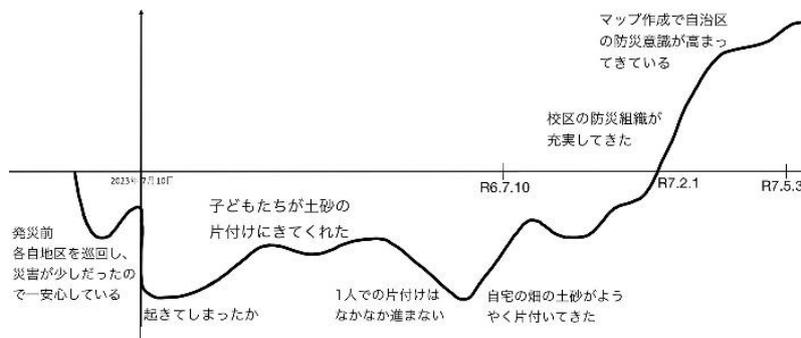


図4 「2番底」現象がみられる曲線の一例

### (3) 復興曲線の手法を用いた効果

本研究では、被災者の主観的な復興感を分析するにあたり復興曲線インタビューの手法を用いたが、この手法を用いた効果として、以下の3点が見出された。

一つ目に、語りの「主役」が被災者自身であることによる語りの多様化、個別化である。災害だけでなく変質者に恐怖感を抱いているという発言が見られたように、恐怖感という共通点から災害以外の心の障壁についての言及が導き出されたことから、個々の災害の捉え方や語り方の違いが表されていた。

二つ目に、曲線データによる心理的変化の程度の視覚的な分析ができたことである。梅雨の時期になると気持ちが沈むが、ランチ会に参加したことで不安感が少し解消したと語った方の復興曲線では、ランチ会に参加する前後で沈む幅に違いが見られ、心の変化を視覚的に比較できることで被災者自身も気づきや客観的な分析が可能になった。

三つ目に、復興曲線として自身の心を記述することによって抵抗感を持つ方の存在を確認できたことである。本研究で対象とした地域住民12名のうち、復興曲線データが得られなかった1名からは、インタビューを行った5月31日は出水期に差し掛かった頃だったため、“心理的にインタビュー調査に答えられる心境にない。もう少し前だったらよかったけれど、答えるには時間が欲しいというのが率直な気持ち”という発言があった。既往研究においては、復興曲線が描けるか

どうかと災害からの回復には関連があり、復興曲線を描けないということは自分の人生のなかで被災したことが意味づけられていないのだとされている<sup>7)</sup>。復興曲線は自身の心をありのまま写し出すものであるため、自身の内で整理され、経験したことの一部分として意味づけられていなければ形として表出することのハードルは高い。また、一度は過去のものとして意味づけられていた被災経験が、災害が繰り返す恐怖により再び「いま、ここ」における問題として引き戻される可能性もあるだろう。このように、被災から約2年が経ってもなお出水期には心が不安定な状態になり、被災経験についての語りが阻まれる状況にあるということも重要な発見であろう。

## 6. 追跡調査

2025年9月6日に追跡調査として第2回復興曲線インタビューを行った。同日のランチ会に参加していた、第1回調査の対象者である3名を含む同地区の地域住民10名から回答が得られ、第1回の結果との比較による傾向や2025年の出水期を経た後の課題について見出された。

復興曲線の特徴としては、第1回同様に災害の危険度が高まる出水期の沈み込みが見られた。図5に示す曲線では発災直後に加え、2024年および2025年の出水期に雨への不安感による沈み込みが見られる。土砂災害が発生した2023年以降の2年間(2024, 2025年)

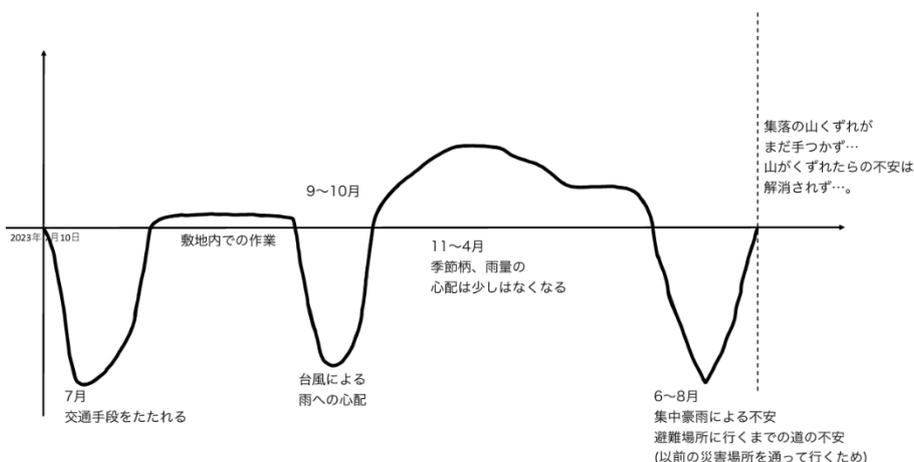


図5 追跡調査で得られた曲線の一例

は大雨による被害はほとんど見られなかったが、物理的な被害がなかったにも関わらず沈み込みが見られることから、過去の災害の記憶が年数を経ても可視化されない内的な部分に影響を及ぼしていることが復興曲線を通して明らかになった。

また、2025年の出水期を通した課題として、気持ちの落ち着きとともに防災意識が薄れてきたといった防災意識の低下や、避難指示が出された際のリアルタイムでの情報共有のシステムが不十分だったという指摘が語られており、これらは実践から浮き彫りになった課題であると言える。復興曲線にはこれらの課題による不安感や落ち込みが心理的变化として表れており、復興から防災のフェーズへと移行したことを示すとともに、防災のフェーズにおいて今後の災害を見据えて取り組むべき課題であることが示唆された。

## 7. 今後の展望

本研究において、YNFが行った支援活動が被災者の防災活動への積極性を高め、エンパワメントしていたことが明らかになった。YNFのように災間の被災地で活動する支援組織が地域で伴走して復興・防災活動を行うことは、住民主体の地域復興を進めるうえで重要な働きかけとなるだろう。そのような組織の仕組み、関わり方について分析することで、災害支援において心の復興に効果的な支援組織の在り方について検討したい。

### 謝辞

本研究の実施にあたって、被災時の記憶を想起し、インタビュー調査にご協力いただいた田主丸町竹野三明寺・富本地区の住民の皆様、ランチ会の運営とともにインタビュー調査のため時間を割いていただいた特定非営利活動法人 YNF 様に、感謝の意を表することとする。

### 参考文献

- 1) 小林一樹(2020), 日本における「復興」とは何かー成長社会の復興と持続可能社会の復興ー, 日本災害復興学会論文集, Vol.15, pp.1-10.
- 2) 岡田陽介(2021), 河村和徳・岡田陽介・横山智哉編著「東日本大震災からの復興過程と住民意識」, 第4章: 主観的被災者意識と投票参加 東日本大震災と令和元年台風による被害の分析, 木鐸社
- 3) 本莊雄一・豊田利久(2024), 東日本大震災からの復興過程における被災者意識の規定要因: 2020年「生活復興住民意識調査」から, 減災復興学研究, Vol.1, pp.1-12.
- 4) 宮本匠(2012), 藤森立男・矢守克也編著「復興と支援の災害心理学」第5章: 復興を可視化するー見えない復興が見えるように, 福村出版
- 5) 仁平典宏(2013), 「災間」における支援の条件: 〈3.11〉と〈3.12〉のねじれの中で, 社会学年誌, Vol.45, pp.3-20.
- 6) 宮本匠(2021), 東日本大震災10年事業「若手研究者からの報告」報告書
- 7) 宮本匠(2018), 県外避難者の復興曲線から考えること, 研究紀要『災害復興研究』, No.9, pp.73-79.